# 父は獣医師だった

辻本 千春

## 1　陽子ちゃん

父は、母の手作りの水餃子が大好物だ。母は皮の一枚、一枚まで作るから手間も時間もかかる。

秋の休日。私は高二で部活に入っていない。手伝う。

「どうなん、このごろの学校？」

母はさらりと聞く。

「うん。まぁまぁ」

「そぉか」

聞きながら、それほどの関心をしめさない。

「クラスの男子でね、東京オリンピックに家族で行った子がいるねん」

「そらぁ、豪勢やねぇ」

母は麺棒（めんぼう）で丸く餃子の皮を伸ばす手を休めない。

東京オリンピックは新聞の一面で取り上げられ、テレビでも放映され、各国選手団の入場行進は圧巻だ。

でも、私は日本選手団のユニホームがなんだかやぼったく感じた。テレビのアナウンサーが、

――1964年、10月10日。日本選手団の行進です。終戦の壊滅的な状況から日本は、首都・東京でオリンピックが開催できるほど復興を遂げました。赤と白のユニホームは日本の国旗、日の丸を表しています――

アジアで最初に、オリンピックが開催された。日本は総中流。上へ、上へとめざす中流意識が広がる。

「新幹線から雪化粧してる富士山を見たって。その子が、千秋ってかわいらしすぎる名前や。おまえ、ばあさんになっても千秋ばあさんって、呼ばれるんやて、言うん」

母は手をとめた。だから小麦粉が飛ぶ。

「それって、その子は、あんたに関心があるってことやない。あんた、なんて返事したん？」

「ええやん。べつに。ほっといて！　って言ったよ」

「あーあ。そこから、なにか、始まったかもしれんのに」

母は、がっくり、肩を落とす。

なに考えてんの？

でも、私はこんな母が嫌いじゃない。ううん。好きかも。

そのうち、餃子もできあがって母は焼くのではなくゆでる。

中学で剣道部の弟の寿也（としや）が帰って一家四人の夕食だ。私たちは大阪に住まい、父は堺市市役所に勤めて平日もわりあい早く帰る。家族そろっての夕食をとても大切にする。

今日は日曜日。深皿によそわれた水餃子が白く、つるんと光っている。父は水餃子をつまみにビールを飲む。

「千秋って、名前はかわいらしいって、言われたって」

母が父に話しかける。もう。おしゃべりなんだから。

「そうか。かわいいか。そうやろ、うん、うん」

父は上機嫌だ。

「どうして、千秋って名前を、私につけたの？」

「秋が千回、巡るように、って願いをこめてやないか」

「妖怪ばばぁやないわ！　そんな長生き、まっぴらごめん」

ガハハとバカ笑いする弟のそばで、父が、はっきりわかるほど気落ちしている。たっぷりの愛情で育まれている。うれしさがこみあげてくる。

「あんたの前に、陽子ちゃんという女の子がいたんよ」

さらっと、母が言った。初めて聞く話だ。

「ようこ？」

「そう。太陽をいっぱい浴びて、元気に育ってほしいって、太陽の陽の、陽子」

母が指一本で、空中で、漢字をなぞりながら言う。

私たち姉弟は、長女、長男。ずーっと、そう思ってきた。弟は年下でも初めての男子だから長男。

が、しかし、私は次女だったんだ！

衝撃を受けた。

「どういうこと？」

私は、父を、ひたと見る。

父は目をそらさない。

考えあぐねて唇を動かす。一気にビールを飲みほした。口角についた泡をぬぐう。

母が、バトンタッチでもするかのように、口を開く。

「あたしとお父さんは、満州で、新婚時代をすごしたの」

満州は1932年、中国の東北地方に日本が満州事変を起こして造り上げた国。中国の人々は偽満州（ウェイマンチョウ）と呼ぶ。

1945年、日本の敗戦とともに消滅した。

そんなカビの生えた古い話は、ごめんだとばかりに弟はわしわしご飯をかきこみ、味噌汁を飲んで餃子をぱくつく。

私は、それほどいやじゃない。

ごくたまに、母から満州の話を聞くことがある。

満鉄時代はずいぶんぜいたくな生活で、一升瓶の酒をまたいでこぼした失敗談など、けっこうおもしろい。

満鉄は、満州に敷かれた南満州鉄道株式会社のことだ。

「それで、ぼくが軍に召集されて……」

父が自分のことを〝ぼく〟と呼ぶのは、けっしてきどってるからではない。習性らしい。

「まって。満鉄に勤めてたんやないの？」

「初めはな。お母さんと結婚したころは満鉄の社宅がある中国の大連（だいれん）に住んでたけど、途中からは軍隊に召集された。それからは転勤、転勤で大変やったなぁ。秀子さん」

母はうなずきながら、

「大連（だいれん）、奉天（ほうてん）、新京（しんきょう）、ハルビン、チチハル」

と、まるで暗記をそらんずるようだ。

「あれは、ハルビンやったの。わたしが身ごもったのは」

母は自分のお腹をなでる。

「戦況が厳しくなってきたから、ぼくが帰ってこれないのはわかってた。だから『男の子が産まれたら、陽一。女の子なら、陽子って名づけてや』て家を出たんや」

「お母さんは、たった一人で赤ちゃんを産んだの？」

「ううん。軍の社宅の婦人部の奥さんたちが手伝ってくれたよ。チチハルでお産したの」

「大変やったねぇ」

「うん。でも、みんな、そんなもんやったから」

母は何事もなさそうに言う。

「それで、陽子ちゃんは？」

母がくしゃと顔をしかめる。

「引き揚げ船でね、一日にコップ一杯だけのおかゆ。あたしは元々体が丈夫やからお乳が出たけど、ほかの人は……」

「どうした？」

弟が口をはさんだ。

「赤ちゃんや小さな子どもが、次々に栄養失調や肺炎で亡くなるから……」



父が母の背中に手をそえる。その仕草だけで、父が母をどんなに大切に、いたわってきたかわかる。

「白いさらしで、ぐるぐる、ぐるぐる、何重にも巻いて、海に沈めるの」

では、陽子ちゃんも。

ううん。陽子姉さんも。

「いっちばん、一番辛いことを、秀子さん、一人にさせてしまった。ほんまに悪かった」

父は母に頭をさげる。

母は下唇を指でつまんで動かす。ゆっくり顔を横にふる。

それ以上、語りたくないようすだ。

「ぼくたちは、一人、一人、別々に引き揚げてきた。ぼくは、陽子が産まれたときも、亡くなったときにも立ち会っていない。苦労かけたな。秀子」

きっぱり、父は言いきった。

もう一度、母が顔を横にふる。

「どこもそんなもん。だんなさんが戦死したり、みーんな、大変やった。船がゆれて、背中がガクッとなったんよ」

「そのとき、陽子ちゃんが？」

「わからへん。気ぃがついたら、背中が冷たかった」

母の体が、小さく小さく震える。

「……姉ちゃんが編んでくれた五本指の黄色の毛糸のてぶくろ。指だけが赤、青、白、黒で、満州の国旗の色やねん。もう絶対使わへんから、黄色の毛糸をジョキジョキはさみで切ってヒマワリの花にして、さらしの布にぬいつけたの」

母は手先が器用で裁縫も得意だ。毛糸なら、何度もほどいてセーターとかに編みなおせる。母は倹約家だ。

満州の国旗の色のてぶくろを、ジョキジョキ切り刻んだのは戦争への悔しさ。ヒマワリの花は、せめても陽子ちゃんへの思いだったのだろう。

「ヒマワリの花が、黒っぽい緑色の海にゆらゆら、ゆらゆらゆれて、いつまでも沈まへんの」

暗い海面に咲く黄色の花。

陽子姉さんが、母と別れがたくて。それともありがとうの気持ちだろうか？

――だから、秋が、千回、巡るように……。

父と母は、私に、名前をつけてくれたのだ。

そんな思いも知らないで……。

いつのまにか、弟は箸（はし）をおいて顔をあげている。

しーんと、食卓が静まりかえる。

初めてだ。夕食がこんな重苦しい雰囲気になったのは。

## 2　馬のレリーフ

母はまごつく。どうして、こんな張り詰めたような食事になってしまったんだろう？　私も緊張していた。

弟は、ほころびている水餃子の中身を、ほじくり出している。本来なら、ぱくっと食べる子なのに。

父は黙って立ちあがり、リビングの壁にかけてある白い石灰のレリーフをはずした。

馬の顔を彫刻した白いレリーフ。

「きれいやろ。馬の目は大きくて澄んでいる。まつげが長い。なにより性格がかわいい。自分を愛しているとわかると、どこまでも甘えてくるんや」

〝愛する〟――なんて言葉を恥ずかしげもなく話す父に、少しおどろく。気づまりな雰囲気をほぐそうとしている。

「お父さんはね、大阪農学校の獣医科を卒業したから、獣医なんよ。だから、軍に召集されてね、獣医幹部候補生、獣医少尉、獣医中尉と昇格していってね……」

母は父にビールをつぐ。

「そらぁ、かっこよかったんよ。朝、馬をひいて兵隊さんがお迎えにくるん。お父さんはさっそうと馬に乗るの」

照れくさそうに、父は残り少なくなった水餃子を食べる。

母と私と弟も、いつのまにか食事を終えていた。

すると、母はめったに出さないお中元の高級菓子を開く。母が弟に回す。弟は一つクッキーをくわえて、もう一つつまんで私に回す。もちろん母も食べる。

「馬はな、繊細な動物で臆病。注意して世話をせんと、けがを見過ごしたら大変や。それを頭ごなしに新兵を叱ったら、あかん。後で上官にこっぴどくやられるからな」

私は、そんな父を優しいと思う。と、同時に誇らしい。

「そんなとき、どうするの？」

「うん。さりげなく、鞍をあげてみる。ここが傷つくことが多いしな」

「それで？　傷を見つけたら？」

「ていねいにきれいな水で洗って、薬をぬりこむ。そして、アンペラという麻ぶくろでおおってやる」

ごわごわするのではないだろうか？

父は私の心配を想像できたのだろう。

「……傷あとが化膿してハエがたかると蛆がわく。それをカラスが食いつく」

たぶん、私は顔をしかめたのだろう。

「背中までなら、だいじょうぶ……そいでもなぁ……馬の頭にまで鳥がとまったら、もう助からん」

父は軍馬をとても大切にしていたのだ。



「カラスだけやないぞ。蟻にもやられる」

「アリ」

私から、声が出た。

馬のような大きな生き物が、ほんの小さな蟻にやられてしまうことがあるのだ。なんという皮肉だろう。

「馬が弱ってると、目、口、鼻、耳、わき腹、毛がうすく皮膚があらわれているところに、蟻がかみつく」

ぞーっと背筋が冷たくなる。

突然、くくくくっ。母が、含み笑いをしている。

どうしたの？　私と弟がきょとんとする。

父は口を閉じた。そして、ぶっと、ふくれた。

「ごめん。話してもええ？」

母は父に詫びる。

父はふくれっ面をもどしてうなずいた。

こんなお茶目な一面があったなんて！　全然、知らなかった。かわいくて、ちょっとくすぐったい。

「あのね。忠男さんは真冬に落馬して、前歯を一本、折ったことがあるの」

「大変やない！」

笑うような場面ではないだろう。私は憮然とする。

「それで？」

弟が、先を促す。

「奉天は大きな町やから、歯医者さんもある。すぐ治療してもらったわ」

母が言うと、アハハハハ、父は声をたてて朗らかに笑いだす。まるで幼子のように。

「笑い事ではない」

弟が声変わりした低い声で、はっきり言う。

父は背中をのばした。

「満州は寒いから地面が凍る。馬がな、前足をすべらせてひざをついた。馬の骨がカクッと音をたててひびいた」

ただごとじゃない。なのに、父は簡単に話す。

「歯を折るなんて重傷やわ。歯医者さんなら、仮歯を入れたんやない？」

私は言いながら気づく。父は歯抜けじじいになったのだ。

「ま、いくら大きな町でもそこまでは」

母は口をおさえて思い出し笑いをしている。ようやく弟もわかって、くすくす笑いが広がった。

父は、男前でとてもハンサムな人だ。それが前歯を一本、失ったのだから……。

映画で若大将シリーズの加山雄三のお父さんで〝上原謙〟という映画俳優に、父はそっくり似ていた。

「ああ。今夜はちょっとしゃべりすぎた」

父が満足そうに腹をなでる。

「そんなことは、ない」
弟がぼそっと言った。私の思いを代弁するかのように。
「そうやわ。ものすごく大事な話やわ」
と、母が馬の白いレリーフを元の壁にもどした。

## 3　進路

あくる月曜日。
朝からぼーっとしている。学校につくと、ただ習慣から机の中に勉強道具を移していた。
……私に、陽子姉さんがいたなんて。
……私は長女ではなくて、次女。
……陽子ちゃんは、今でも、冷たい、暗い海に……。
パチン。
音がした。
ピクンと体が反応してしまう。
「なに、ぼーっとしてんねん？」
隣の席の山根風雅（やまねふうが）が、私の目の前で、指を鳴らしたのだ。
東京オリンピックに行った子だ。
風雅なんて優雅な名前とは、似ても似つかない、無骨で、大男で、にきびづらの、いけ好かない男子だ。
「何回も、何回も話しかけてんのに」
「へ？」
「海んなかで、ウツボに出会ったような顔してるで」
どんな顔や、いうねん。
そや。海にはウツボがいる。鮫もいる。だから、さらしでぐるぐる、ぐるぐる、何重にも巻きつけるのだろうか？
それで、かじられたり、食われたりしないのだろうか？
「おい！」
パチンと、もう一度、風雅が指を鳴らす。
「しっかりせえ！　今週末やで！　進路決めのプリント、提出すんは」
風雅が私に向き合う。
「ああ……そうやった。もう、そんなん、決めなあかん時期やった」
「ほんま。たよんないなぁ。しっかりせえよ」
その口調にはやわらかなひびきがあった。
私たちの学校は三年生になる前に進路別コースを決める。
四年制大学理系――男子が多い。
四年制大学文系――男子と女子の混合だ。
就職・短大コース――ほとんど女子だ。



大まかに三つのコースに別れる。二学期の秋ごろからそろそろ決めて、三学期に正式に決まる。変更可能だが。
「オレは東京の四年制大学に行きたい。文系の社会学部」
風雅が、すーっと体を寄せてくる。
「いっしょにする？」
「えっ！」
とっさに身を引く。
「やめてよ。冗談、きついわ」
冗談は顔だけにしてほしい。いらついていたら、先生がきて苦手な数学が始まった。もう風雅は前を向いた。
その日は一日中、なんとなく落ちつかなかった。
いつもどおり、父をまじえての夕食だ。
テレビでは、ニュースでベトナム戦争を取り上げている。飛行機が、低空飛行から徐々に高度をあげている。比翼がゆれる。尾翼あたりから噴射される煙。
緑ひろがる田園地帯に、灰色の煙を撒（ま）いている。
なにを撒いているのだろう？
「日本を戦争で負かしたら、今度はベトナムかっ」
父が吐き捨てるように言った。
その口調に、私は、きゅっと胸がつまる。父はめったに悪口を言わない人なのに。眉の間に深い縦じわが一本できた。
――今度はベトナムか！
アメリカとソ連の冷戦が、背後にあることは新聞などで伝えている、と父が教えてくれた。
父はことさら戦争の話になると意固地になるようだ。
あえて、こちら側、私に引き寄せたいような気がした。
「あのー。進路決めのプリント、出さな、あかんねん」
父と母は、いっしょにふり返った。
「千秋はどうしたいんや？」
もう穏やかになった父は、先ず聞いてくれた。
「……私、勉強はきらいやし。でも、ちょっとは大学生活も味わいたいから、短大コースにしようかな」
ぷっと、母が笑う。
「あんたは気楽でええな」
「それで、短大を出て、なにをしたいんや？」
父は真顔だ。
「うん……。まぁ、ちょっとは調べたんやけど、司書っていうか、図書館に勤めるのは楽しそうでええかなって」
図書館司書は短大の単位でなれそうだ。
「司書はええと思う。けど初めっから、短大って決めつけんと四年制にして、選択肢を広げる手もあるぞ」
私はちらと、にきびづらの風雅を、思いうかべる。

おもに母に向かって、しゃべってしまった。
「四年制にすると、山根といっしょになるかも……」
「あほちゃうか。そんなことと、自分の一生をごっちゃにするなよ」
弟はさもばかにしたように言いきった。
「そやね」
「正直すぎ。姉ちゃんはポーカーはできんな」
「うん。苦手」
父が笑ってる。
「私が中学生のころ、本を読みたいって言ったら、お父さんがダンボールごと世界少年少女文学全集を買ってくれたでしょ。それから、本を読むのが好きになったの」
「あんたっていう子は、ほんま考えが足らんというか、言い方の順番をまちがえてるというか……」
母が頭をふる。
「役にたったんなら、それで、ええ」
父が首肯する。
「それでも、その山根風雅くんが教えてくれたんやないか。その進路別を出す日を。人を外見だけで決めつけるのは、よくない。そんな排他的ではいけないよ」
父は、私を諭す。
その一週間。私はさんざんに迷いに迷い、考えた。
司書の仕事はおもしろそうだ。好きな本に関われるのが楽しみだ。しかも望んだ短大にすると数学の試験はないし。
私は、やっぱり就職・短大コースにした。
風雅は四年制文系コース。
「そうか」
風雅はあっさりしていた。それからも朝一の教室で、
「おっ」
風雅は軽く手をあげる。
「おはよ」
私はちょんと頭をさげた。
——排他的になってはいけないよ。
父が言った言葉が、頭の片隅にあったから。

## 4　父の部屋

けっして書斎とまで言えないが、父のためだけの部屋というか、納戸のような所が家の一画にあった。
「あそこを、一回、片づけてあげよか？」と母が言っても、
「いいや。ほっといてくれ。触るなよ」
と、父は、母にさえ入らせない。
すると、よけいに、覗いてみたくなる。



学校から帰ると、母は編機で毛糸のセーターかなにかを編んでいる。趣味の編み物を始めると夢中になる。弟は剣道部で遅いだろう。まだ陽のある昼すぎだ。
私はこっそり、その場所に入ってみた。
小さな、狭い部屋で、小窓には鉄の格子がはめられていた。うす暗い。本やノートが足の踏み場もないほど積み上げられている。
一枚の写真が床にすべり落ちた。
古い写真だ。制服だろうか？　洋服の首元までボタンをとめて、前をきりっと向いている。けれど、あごが細い。まだ幼さが残る少年だ。
写真をはさんであった便箋も落ちた。黄色く変色してる。
「満州」とか「勝次」の文字が、目に飛びこむ。
ヒヨドリが庭木に巣を造り……死にそうな雛を……と拾い読みしていたら、最後に坂上忠男様とある。
いけない！　これは父への手紙だ。私は急いで写真と手紙を本の間にはさんだ。
額の冷や汗を手の甲でぬぐう。
ぎっしり本を詰め込んだ本棚の奥に、キラリと光るものがあった。なんだか誘惑するかのように。
そーっと腕をのばして取りだしてみた。
アンモナイト？
それとも深海魚？
それは、くすぶったガラスの幅広の円筒の中にあった。円筒は、丸い小さな取っ手がついたふたで覆われてる。
なんだろう？
きっと元は肌色かおそらくは桃色だっただろう。色が抜けて、褪せたのだろうか？
テニスボールを二回りぐらい大きくしたような白茶けた丸い物体から、足なのだろうか？　ミミズの先っぽをとがらせたような物が、何十本も、無数に一塊りになって飛び出している。
その足のような、ミミズのような物は、ぴくりとも動かない。
たぶん死んでいる。それだけは、わかった。
不気味で、気持ちが悪く、持っているだけで、ぶるぶる震えて落としそうになる。
そのときだ。
「感心したことやないな」
父の声だ。
ゆっくりふり仰ぐ。
父は、私の手から、ガラスの円筒を抜き取り、そこだけはきれいな机の上に置いた。
「ごめんなさい」

私は深く、父にあやまった。
「人が入らないでほしいと言ってるところに、黙って入るのはよくないよ」
「はい。もう二度とはしません」
父は黙ったまま、じーっとその物体を見つめている。
いったい、なんだろう?
「あのぉ……お父さん……」
言いながら、あれ? と私は思う。
「どうして、お父さんがいるの?」
その間抜けな質問に、父の表情がくずれた。
「あほやな」
言いながら、父は自分の腕時計をさしだし、電灯から伸びているひも式のスイッチをひっぱった。部屋がぽちっと明るくなった。腕時計は六時半近くをさしている。
いつのまにか、父が帰宅する時間になっていたのだ。
父は一呼吸、間をあけた。
「これはな、ぼくが学生のとき、解剖実験をした心臓」
「え?」
「フィラリア」
と、足のような、ミミズのような物を指さす。私は自分の心臓を押さえた。くすっと父は笑った。
「人間の心臓やないよ。大型犬の心臓や。フィラリアというのは、寄生虫のこと。ここまで心臓に食らいついたら、そら、もう、心臓の機能は果たせんなぁ」
フィラリア? 寄生虫? 解剖実験?
初めて聞くことばかりだ。
「ぼくは獣医科だった。病死した動物を解剖して勉強したんや。貴重な例として、ホルマリン液につけて保存した」
「そうだったんだ……じゃあ、ほかの動物も?」
「やったなぁ。猫。猪。猿。馬……」
「全部、ホルマリンにつけるの?」
「全部やないよ。こういうはっきりしたケースだけや」
「……」
私はもっと叱られると覚悟していた。でも、父はふだんどおりの穏やかさだ。
いけないことは、きちっと教え諭してくれたから、もう二度と同じあやまちはすまいと、自分に誓った。
台所から、母の声が聞こえる。
「みんなぁー。晩ごはん、できたよー」
おいしそうな香りがただよってくる。とたんにお腹がすいてきた。
父は、ホルマリン液のガラスの円筒を、元にもどした。そして、父は私の肩に腕をまわした。温かい。
こういうときの父って包容力があって頼りがいがある。



この父に付いていったら、絶対まちがいない。私は深い安心感をおぼえる。そのままの姿勢で、私たちは食卓へ急ぐ。
「あら。お父さんも千秋も着替えてない。早よ着替えて」
「ホイ。合点承知!」
父はおどけて、足を尻まではね上げる。
「ふふふっ。お父さん、いうたら」と、母。
今夜はロールキャベツ、煮込み料理だ。母は市の料理教室に通っていた。父のおいしそうに食べる顔を見たいから。母はガスを弱火にする。弟はすでに席についていた。
「おそい!」
「ごめん。着替えに手間どってん」
私はナイフとフォークを使ってロールキャベツを切る。解剖実験をしているような気分になる。
「お父さんは、前は、なんで、獣医になろうと思ったの?」
「うん。ぼくの実家は大きくて、田や畑だけでなく、山もいくつも持っていた。放牧をしてたんや」
「それで、獣医さんやね」
「そうや」
父はロールキャベツをナイフで切ると、箸に持ちかえて、ゆっくり味わう。
「当時は、家の財産は、後継ぎといって、長男に全部を譲り渡したんや」
「なんで?」
「二男や、三男にも財産分けをしたら、その家の土地が小さくなって困るから。次男のぼくは、自活できるように、放牧にも役立つように、獣医になったんや」
「ふーん。長男、次男の間に、そんな差があったなんて。兄弟は平等のはずやのにね」
弟はロールキャベツ三個をたいらげて、四個めだ。
「次男のぼくにではなく、長男の忠輝兄貴に、先に赤紙、つまり召集令状が届いた。運が悪いことに、兄貴が乗った船が撃沈されて、戦地に向かう前に、兄貴が亡くなった」
「かわいそう」
「なにもかもタイミングが悪かったなぁ……」
それは、そのとおりだけど……。なにか、奥歯に物がはさまったような言い方だ。代わりに、母が口をはさむ。
「千秋のおじいさんは早くに病気で亡くなって、残ったのは、お義母さんと兄嫁さんと、四歳の忠一くんと忠男さんだけ。昔は女の人には遺産分けができなかったの」
母は結婚した父の実家の坂上家のことをよく知っている。
「兄嫁の玲子さんがね。長男の忠一に遺産分けしてほしい。坂上家の後継ぎは、この小さなター坊一人ですって」
「かなり、強欲」

弟は聞いてないようで、けっこう聞き耳をたてている。
「もともと母と玲子さんは折り合いが悪かった。だから、母のほうが、家を出るって言ったんや」
父がたんたんと語る。
「そんなん反対やわ。お姑さんが家を出るなんて！」
母が憤慨したようすで語る。
「おばあちゃんは、どうなったの？」
私はせきこんで聞く。
「孝おじさんが姪の母を小さいころから可愛がってた。おじさんが、わしんとこへ来いって言って、母は行ったんや」
父が教えてくれた。
「なのに、お父さんは、どうして、満州に行って、満鉄に入ったの？」
「う、うん……やっぱり、母は居候やろ」
居候は気を遣うことが多い。
「満州は広大で、滋味のこえた土地が安く手に入る。それに、満鉄社員は高給料。ぼくは広い土地を手に入れて、牧場を造りたい。母を呼び寄せようって考えたんや」
「せやのに、軍に召集されたら計画が水の泡やね。満州なんか、行かなきゃよかったね」
「なに、言うてるの」
また、母が割りこんでくる。
「農業移民で満州に行ったら、二十町歩の土地がもらえる。二男も三男も、土地持ち、嫁さん持ちになれるんよ。みんな喜び勇んで満州へ行ったわ！　娘は大陸の花嫁やし！」
「そうなん？」
「そうや！　世界地図で見たら、日本なんて、ちっちゃい、ちっちゃい。それが広い大地の満州や！」
母は興奮ぎみで鼻先が少し赤らんでいた。
「そのころは世界恐慌で、日本は貧乏になってた。乗り越えるためにも満州。それが国の政策、つまり国策やった」
父は、そのころの世界情勢を話す。
「そう。満州は、夢！　満州は希望、やったの」
「ふーん……」
今一つ、ぴんとこない。
「満州なんて、苦労の連続だったんやないの？　引き揚げだって、あんなに辛い思いをしたやない」
「初めはよかったんよ。だから、あたしの紀見村から平原さん一家も、山本さんちも。たくさんの人が満州へ渡っていった。ちょうど、寿也ぐらいの近所の田倉勝次くんも『少年見習技術員』として満州に渡ったの」
弟が、引合いに出すな、とばかりに胸をはる。
――「満州」「勝次」つい、さっき目にしたばかりだ。
でも、それを口には出せない。母が口を出す。



「紀見村の国民学校で、よぉできる子でねえ。それでも家が裕福やないから、上の学校へは行けなかったの」
「おれとは関係ない！」と、寿也はむくれる。
「関係ない……こともないかなぁ。子どもも戦争に巻き込まれたんやから。だんだんに戦況が悪くなってきて、内地は空襲がひどくなり、子どもたちは疎開させられたの。玉音放送（1945年8月15日、昭和天皇が日本の降伏をラジオ放送）を聞いて、今の日本に続いてるから」
「おばあちゃんは？　陽子ちゃんは、どうなったの？」
私は気になる。
「陽子ちゃんのことは前に話したよ。敗戦後、あたしたちは孝おじさんとこのお義母さんの家を訪ねたの」
母は、父の湯呑にお茶をつぎたす。
「お義母さんは風邪をこじらせて休んではった。『忠男、よう帰ってきた。よう帰ってきた』ってよろこんで、それから『忠男のこと、あんじょう頼みます。二人、仲ような』て、あたしの両手を包みこみながら言うてくれはった。なんて優しい人やろ。年取ってても、きれいな人やった」
母は自分の湯呑を両手でくるむ。
「それから、一か月もせんうちに、お義母さんは安らかに亡くならはった」
母は一服お茶を飲んで、ほーっと息を吐きだした。
父は黙ってお茶を飲んだ。
弟が食後の牛乳一瓶を一気飲みする。いらいらしたようすで、ガタンといすを鳴らして席を立った。
私はそっと席を立つ。

## 5　三十秒

高校三年生は、完全にコース別にカリキュラムが別れる。五月になるとはやばや修学旅行がある。さっさと終えて、二学期、三学期には受験態勢に追い込むためだ。
行先は、広島、長崎だ。
「よかったな。日光、東京方面に決めるよりはずっといい」
それは、広島も長崎も原爆を投下された町ということだから？　それでも、私は東京に興味があった。
「泊りがけでしか行けない東京に行ってみたかったな」
「いや。広島、長崎は、日本人なら体験しておくべきだよ。ろ……」と言いかけて、父は口を閉じる。
〝ろ〟の後に小さく〝すけ〟と、もれ聞こえた。
「あ、あ。いや。これはあざける言葉だった。慎まなきゃ。ロシアなんて、『屍を踏みこえて進め』って思想だ。そんなのは、絶対、受け入れられない！」
一瞬、体が強張る。こんなに激しく非難する父を見るの

は二度目だ。ベトナム戦争の話のときにも怒ってた。
でも、私が、父の部屋に、断りもなしに、入り込んでしまったときけっして責めなかった。
その父が、ここまで語気を強くするなんて！
「どうして、急に、ここでロシアが出てくるの？　アメリカじゃなくて」
「う、うん……」
しばらく父は口をつぐむ。
やがて、おもむろに、
「……昔な。ぼくが軍隊にいたころ、同期といっしょに風呂に入ったんや」
私は父の話に耳をすます。
「くーっと、急に、心臓が差し込むように痛くなって……」
「どうしたの？」
母は不安そうな声をだす。
「心臓マヒ？」
あわてて弟が聞く。
もし、父がそんなことになったら？　どうしよう？　私は辛い、ただ、ただ、辛い。
「同期は湯をかけて温めようとするから、『違う。冷やせ』『心臓マッサージ』。そいつは、よくやってくれた。三分ぐらいかなぁと思ったら、実際は三十秒ほどだったって。倒れてたのは」
母はほっと息をついた。
「そいでもなぁ、そのわずかな間に、いろんなことを思い巡らすんだよなぁ。兄貴といっしょに夜釣りに行ったこと。楽しかったなぁ。サイラめしといって、母親が焼いたさんまを米の上にのせて炊いてくれたこと。うまかったなぁ。そいつといっしょに、馬のお産に立ち会ったこと。次から次と、まるで、走馬灯のように思いだすんや。**死ぬ**って、こういうことか、と思ったなぁ……」
父は遠い日を思いだすような眼差しになっている。
「そんな縁起の悪い話、すんなよ！」
弟は真剣な顔つきで怒る。
「悪い、悪い」
父があやまる。
「お兄さんといっしょに、夜釣りに行ったなんて、兄弟仲は良かったんやねぇ」
しみじみと母が言う。
「当たり前やないか。二人っきりの男兄弟や。夜に、ウナギを釣る。取れたら最高にうれしいし、うまい！」
父の顔がほころびる。
「それが、赤紙一枚で、あんなごたごたになるんやねぇ」



私が、ようやく、口をはさんだ。
「戦争そのものがまちがいや。兄貴は死んだ。あんな死に方、あるか？　むだ死にやないか。狂ってる！
アメリカは原爆を落とした。ソ連はシベリア抑留をやった。日本だって……」
「なんだよ！　日本は被害を受けたんだ。世界で唯一の被爆国なんだぞっ」
弟が、父に、食ってかかる。
「うっ」
父は言葉を返さない。しばらくその場に座っていた。
「寿也……君に、なにが、わかる？　わかってるのか？」
父は弟にまっすぐ向かい合う。
けれども、その眼差しは議論になることに躊躇（ちゅうちょ）しているようにも見えた。
「……ぐっ」
今度は弟が言葉につまる。
父は、ゆっくり立ちあがる。
そして、それほど広くない庭に出てしまった。たぶん、たばこを吸うのだろう。ガラス窓をとおして、白いうすっぺらな三日月がのぼっていた。
なぜ、父は、ロシアには『屍を踏みこえて』の思想があると言ったのだろう？　そんな見下したような言い方を、なによりいけないと言う人なのに。
なぜ、アメリカとロシアの同列に、日本と、言ったのだろう……？
ふと感じる不安感。
父は、なにを、抱えもっているのだろう……？
満州の文字が、頭の中でちらつく。
わけのわからない焦燥感にさいなまれる。
このごろ、夕食で、深刻な話し合いになることが多い。
もやもやと寝付けない。私にしたらめずらしい。

## 6　写真

家での夕食のとき、どんな話になっても、学校へ行くと気分は１８０度変わる。修学旅行のためのしおり作り、班ぎめ、実行委員会など準備はもりだくさんだ。
いよいよ出発。
予定どおり、広島の原爆資料館に班ごとに入る。暗い。ほかの学校の生徒や見学者もいる。
私は、人のお尻について歩きながら、写真や絵を見る。恐い。ひしゃげたアルミの弁当箱の真っ黒になった米を見

たとき、胸がつまった。食べられなかったんだ。
当たり前だ。原爆投下は朝の八時十五分。昼のための弁当なんだから。
焼け焦げた三輪車。小さな子は乗っていなかったのだろうか？　その子はどうしていたのだろう？
私はふらふらになりながら、広島の原爆資料館を出た。
太陽の光が目を射抜く。めまいがしそう。

次の日の予定が、長崎のグラバー邸だったことに、私は救われた。そんなこと、思っちゃいけないかな。
でも、でも、美しいグラバー邸になぐさめられた。かわいい花が咲いてる花壇。日本風の屋根瓦だけれど洋風の建物。グラバー邸がある丘から、長崎の港が見わたせる。
その流れで平和公園へ。そして平和祈念像の前に立つ。
すごいなぁ、大っきいなぁ。
平和祈念像は、長崎の爆心地あたりの平和公園の中にある。高さが10メートル近い。筋肉隆々の長髪の男性が、腕一本をまっすぐ空にのばし、反対側の腕は、水平に広げている。鍛えぬかれた足のふくらはぎ。
なんか、すごい。胸がスコーンと羽ばたく感じ。
この平和像を背中に、私は右手で天をさす。さらに指一本をつきあげる。左側の腕を水平に伸ばす。

「えーっと、えーと。天さす指は、なんだったっけ？」
「過去を示し、原爆の脅威をあらわす」
ふりむくと風雅が横にいた。同じポーズをとりながら、
「水平に伸ばした腕は、なにを示すのですか？」
「未来。平和への未来」
私が答えると、
「よくできました」
と、ちらと舌を出す。
「もう！」
追いかけると、ひらり、風雅は飛びのいて逃げ去った。

あっというまに帰路だ。
フェリーでの移動があった。私は、甲板のベンチに友だちと二人ならんで座ってた。
ゆっくり陽が沈む。
海面に、太陽の道ができて光り輝いている。
暗い海と、空一面が夕焼けの朱色にそまって、コントラストがくっきりしている。
カシャッ。
音がした。
「なに？」
ふりかえる。風雅がシャッターを押したのだ。



「しゃ、写真」
風雅がたじろいでいる。こんな風雅は見初めだ。
「かってに写真なんか撮って、どうするつもり？」
「べ、べつに。オレは修学旅行の実行委員の写真部やから」
「その写真、どうすんの？」
「卒業アルバムに入れるんや」
「へぇー。きれいに撮れたんかなぁ」
私はベンチから立ちあがる。
「採用するか、せえへんかは、オレしだい」
風雅は開き直った。にくたらしい。
「できた写真は見せてよね」
「オレの腕にミスなし。へんに写ってたら、そっちに問題ありや」
「ちーちゃん。うまいこと、撮れてたら、いいんちがう」
友が私の顔を見あげながら言った。ま、そうか。

学校に帰ると、四年制大学に進む人たちには、ふだんどおりの厳しい時間割だ。
ある朝。風雅が一枚の写真を見せてくれた。
長崎の平和公園で、風雅と私がならんで、平和祈念像と同じポーズをとっている。
風雅は体が大きいからけっこう様になっている。ふふっ。
ちょっと笑ってしまった。次に、ハッと気づく。
「これ、だれが撮ったの？」
「実行委員の写真部」
「もしかして、アルバムに使う……ことはないよね」
「冗談はやめてんか。こんなウツボ、載せたら、平和像が気ぃ、悪うぅするやろ」
風雅は写真をとりあげて、制服のポケットに入れた。

## 7　真冬

夏休みは、受験生には天下分け目の関ヶ原。古くさい数学教師のじいさんがさわぐ。光陰矢のごとし——いつしか、風邪に注意の受験シーズンになっていた。

「千秋ー。おりてきてー。チアキーッ！」
深夜。
母が階下から叫ぶ。私は階段をかけおりる。
「お父さんが！　お父さんがっ！」
父が寝巻の胸元をつかみ、苦しさに顔を歪めてる。
「先生、呼んでくる」
母が飛び出していく。

ふとんに横たわった父が、腕を二本、伸ばしてくる。
とっさに、その両の握りこぶしを包みこむ。
「薬があるかな？」
「あるよ。絶対に」
父のこげ茶色の手の甲に、親指から高高指にかけて、ほんの少し色が薄くなった楕円形を見た気がした。
こんなの、今まであっただろうか？
それとも蛍光灯の光のかげん？
こんな緊迫した場面で、なにを考えてるのだろう？　と自分を責める。
しかし。握りこぶしの温もりが、私をほっとさせる。
母は、そのとき、家の外に飛び出していた。掛りつけの医者を一刻も早くと、焦っていたのだ。
深夜の暗闇に。
転げこむように、初老の女医が、居間に上がりこみ、注射を一本打った。
「なんや！　なに、打ったんや！」
父には医者の心得がある。
「ビ、ビタミン剤です。た、ただの」
女医はおどおどと体をのけぞらせる。
その脅えに、不吉な予感を感じる。
いつしか白衣を着た救急隊員まで家に上がりこんでいる。さまざまな器具をとりだし父の寝巻の胸をはだける。
「いやや！　行かんぞ！　どっこも行かんぞ！」
「わかってる。わかってるよ。どっこも、つれて行かへんよ」
母の声には、穏やかな癒しのひびきがあった。
父の枕元においた医療の補助装置だろう、透明な容器の中の水泡が音もたてずに一つずつ消えていく。
父の命のともしびが消えるのだろうか？　その容器の水泡とともに。
私は、その意味を理解することを、拒みたいような、避けたいような気持ちでいた。
母が、父のほほに、片手を添えている。じーっと父を見つめながら。もう片方の手で、無精ひげというべきあごひげをなでている。
ちくちくするのだろうか？　それとも、じゃりじゃりだろうか？　私はその感触を思い出す。
どこへも行かんぞ——きっと病院へだ。
父は察したのだろう。私はパジャマのズボンの上で両手をそろえ、正座をしていた。かたかたかたかた。
小刻みに震える。
寒いのだ。二月中ごろ。一年で一番寒い季節。
それと……。



あわただしく人が去っていく。
父の枕元の容器に入っていた水がこぼれて濡れた畳を、母がタオルでごしごしと拭き取る。
「あたしいうたら」
母はそのタオルを投げ飛ばした。
父の足元、ふとんのすそ側に、弟がいた。
いつから？
弟は自ら階下のようすに気づいたのだろうか？　それとも、いつ、誰が声をかけたのだろうか？　母？
弟は正座をして、黙って、両の握りこぶしをひざ上においている。
母は、弟がいることに気づかない。なにもかも、消し飛んでいる。
その母が、そっと、父に掛けぶとんをかけなおす。
さらにかけたはずの掛けぶとんを、もう一度、めくる。
「ここで、朝まで、いっしょに寝よ」
「うん」
「冷たいことはないよ。気持ち悪い？」
「そんなことない。そんなことあるはず、ないよ」
私は激しく顔を横にふる。
そのとき、弟と目が合った。
弟は、こくんと、うなずいた。
私もうなずきかえす。弟はすっと立ち上がって、その場を離れた。
私と母は、父を真ん中に、朝まで一つふとんの中で、眠った。
冷たくなかった。
私は、いつのまにか、眠ってしまったのだろう。冷たさを感じる前に。
目覚めると弟がいた。目を充血させて。
弟は二階の自分の部屋のベッドで眠った、と思っていた。けれど、もしか、弟は一睡もしていないのかもしれない。かすかに、弟の歯の音が鳴っている。
……
父は、狭心症という心臓が激烈な痛みにおそわれる、突然死だった。五十四歳。
なにもかもが、ブチンと、切れてしまった。
もっと、もっともっともっともっと。
父から、話を聞いておかなきゃいけないことが、あったはず。
もっと、もっともっともっともっと。

語り合いたかった。
もっと。
いっしょに夕食を楽しめるはずだった。

初七日をすませて、二、三日ぐらいだっただろうか。
母は、あの日の夕食に赤ワインとパスタをだして、父の好物ではなかったことを悔やんだ。とても、とても、悔んだ。弟が、後ろから、母の肩に、手をそえる。
母がふりむく。
「あ。ああ」と、母は間延びしたような声を出した。もしかしたら、父と勘違いしたのかもしれない。
「ふっ」
と笑って、弟の手に、母は、自分の手を、しっかり重ねた。

## 8　弟の悩み

それでも、やがて、生活がもどってくる。
父は市役所に勤めていたから、母に、ほぼ半額の父の年金が支払われる。
そして、軍人恩給も。
「お父さん。軍人恩給があるから、なんとかやっていけます。心配せんとって」

朝晩、父の遺影に語りかけるのが、母の日課になり楽しみになっていった。母は、私にも、弟にも、それまでどおり、何も変えるなと言う。
「でないと、お父さんが心配するやろ」
弟は剣道を続ける。私は短大を受験し、無事に合格した。きっと、父はよろこんでくれると思う。
学校へ行く。しばらく教室はそれぞれの受験や、合否判定でざわついていた。
風雅は東京大学、一発合格。
ヘェー。やるな。すごい。とか羨望の声が聞こえてた。
卒業式のあと。
「お父さん、ご愁傷さまでございました」
風雅が深々と頭をさげた。
「ありがとうございます」
私も頭をさげた。

それから、母はダンボール紙の箱を作る内職を始めた。部屋というか家中箱だらけになって、すぐやめた。
そして、編み機で幼児のロンパースやワンピースを編む仕事を得た。毛糸のロンパースの胸あてにコアラちゃんを編み、いろんな毛糸のワンピースにししゅうをしたり。
ほほえましい商品だ。



私たち姉弟がいないあいだに打ちこめる仕事がある。
表面的には母は元気になって、出来上がりを納めにいく。
私は短大からさっさと帰り、母につきあった。

私は短大を卒業。地元の図書館に勤めている。
弟は、あれから公立高校、国立大学へとすすみ、今では社会人だ。仕事が忙しく、なかなか夕食を共にできない。
母は編み物の仕事をとっくにやめた。けれども、手が込んだ料理を作ることはなくなった。
その夜は、たまたま母と私と弟の三人で食事をする。
「こんなことなら、水餃子でも作ったらよかったね」
「お父さん、好きだったよねぇ」
「おれも、好きだったな」
弟が言う。
「あんたはひたすら食べるだけやったやない」
「アホいえ。おれも、家族が話し合うのはいいことや、と思ってた。そいでも、古い昔話や戦争の話が多かったやろ。まいったよなぁ。あれには」
「へぇー。そんなこと思ってたん？」
「うん」
弟が素直にうなずく。
「おれなぁ……あのころ。剣道部のやつらと、うまいこといってなかったんや。それでも、おれは剣道が好き。やめたくはない。同時に続けるのも苦しかった」
「そんなことが、あったの？」
「うん。そんなときに、戦争の話をされても、どうでもええやないか。今は平和やって思ってたなぁ」
今さら、私はそのころの弟の悩みを知った。
「それにしたら、あんたは、ときどき、ちゃんと、相槌を入れてたよ。えらいやんか」
「ヨイショすんなよ。でも、おふくろの引き揚げの話や、おばあさんの話はなんでか興味があったな……。おやじの風呂の三十秒の話は、強烈やった」
「はい。おまちどうさん」
母は私たちの好物のスペイン風オムレツを作ってきた。
「おっ。さすが。これ、大好きやった」
「でも、戦争の話ばっかりやなかったよ。馬の話もしてくれたもん」
「あれはよかった」
弟はじゃがいも入りのスペイン風オムレツをぱくつく。
「それから、歯が折れた話もね」
母が言いだして、三人で笑った。
笑いながら、母は壁の白い馬のレリーフを見上げた。

# 9　再会

きのうはひさしぶりに楽しい夕食だった。
また、私は毎日の仕事につく。フロアーでの貸出し、レファレンスの仕事、予約された本の手渡し、仕事はたくさんある。交代で事務室にもどって、次は事務とさまざまだ。

ある日。私はレファレンスの席についていた。
夕暮れどきで、館内はうす暗くなり始めていた。
大男がいる。
一歩、一歩、大股で、大男が歩いてくる。
私は思わず身構えていた。
日焼けしてまっ黒な顔に、ひげぼうぼうだ。がたいがいい。まるで山男、いや雪男か。
でも、図書館のマナーには通じているようだ。小声で、
「ひさしぶりー」
「えっ？」
誰だろう？
私、こんな人、知らないけれど……。
あ。よくよく見ると、山根風雅だ。野生的になって、目に勢いがある。

「どこかでお茶する？」
風雅はあいかわらずだ。
なに、言ってんだろ。突然に。
けれども、もうすぐ職員の勤務が終わる。
どうしようか？　迷う。母には一本電話を入れておこう。
「〝たまる〟で、待てる？」
私は高校の文化祭などの後で集まった店を指定した。
「おう」
風雅は、図書館の閲覧場所でしばらく本を読んでいたが、閉館時間に出ていった。
私が外に出ると、木枯らしが吹きあれている。コートのえりをかきよせた。

〝たまる〟のドアをあけると、店の奥で手をあげる。
風雅はすでにお好み焼きを食べている。熱々の豚玉をほおばりながら、しゃべる。
「ふひゃ、∨+ⓢ　ひゃ、なに、する？」
「イカ玉」
「うぐっ、ぐ、オレ、ぶ、豚玉」
「まだ、食べんの？」
ごくり、風雅は呑みこんだ。ソースのついた口角を、手の甲でぐいっとぬぐった。



「おまえは地元の図書館に勤めたって聞いてたから、すぐわかった。あの修学旅行から八年たってオレらは二十五歳。けど、おまえ、変わらんなぁ」
「山根は変わったよね。雪男？　それとも、オッサンかな」
ゲッ。風雅がむせる。私は鉄板にイカ玉をひろげる。
風雅は東大だから安田講堂事件が、私の頭をよぎる。
（筆者注）
　1960年代に、安全保障条約反対の学生運動が起こる。さらに1970年代に、この安全保障条約の自動延長・改定をめぐって反対運動が盛り上がる。安田講堂は東大にある講堂。学生と警察官との攻防が展開された。
「ねぇ。私は短大やったから、あまり影響はなかったけど、四年制に行った子は、安保反対、延長反対、とバリケード封鎖してすごかったって。山根んとこも、安田講堂事件があって、大変やったでしょ？」
　風雅は黙ったまま、豚玉をひろげる。
「1969年、1月18日。安田講堂事件。オレは単位を落として、まだ三年やった。四年生は就職か、卒業か、あるいは逮捕で大変やったらしいけれど……」
「え？」
「オレ、今、大学院で中国史の研究してるんや。あのころ、シンポジウムがあって、ゼミの教授が高齢やから、なにかと下準備を手伝わんとあかんかってん」
「……」
　私は意外な気がする。
　風雅って、こんなやつ？　もっと学生側っていうか、私らの気持ちがわかるやつやったんと、違うの。
「あのな。日米安全保障条約は、ものすごー危険や」
「そんなん知ってる。私も、話は聞いてるもん」
「1951年、サンフランシスコでの講和条約といっしょに日米間で軍事的な関係を結んだ。政府は、安全保障条約の自動延長・改悪を通そうとする。今度こそ阻止しないと。けれども、バリケード封鎖をして暴力に訴えたら、あかん！」
　風雅は少ししゃがれた声で、はっきり言った。
「それは、そうやけど……」
「全共闘や新左翼が、東大の安田講堂を占拠してしまった。デモ行進をして、平和に話し合おうって、努力してたのに」
「そうやったの。山根は東大一発合格で順調に卒業して、大企業か官僚にでもなってるって、うわさやったけど」
「あほか。安保条約はオレらの生活を脅かす。といって、暴力はだめや。平和的なデモ行進で訴えないと意味がない」
　私ったら、単純に風雅に腹をたてていた。あまりのアホさかげんに情けなくなる。
「オレは留年もして、今、どうにか大学院で研究してる」

（筆者注）
1972年9月。田中角栄と周恩来首相が、北京で日中共同声明に調印して国交回復した。

「これからや。始まる！」
「まだまだ民間での往来は難しいやろけどね」
社会人になって長い私は冷静に伝える。
「オレな。中国史を研究すればするほど、日本軍が中国や朝鮮、アジアの人々にどれほどひどいことをしてきたか、だんだんわかってきた。その資料を探して集めてる。それにベトナム戦争が激化して安全保障条約が関わってる」
「父も。父も、ベトナム戦争のことは、ずいぶん怒ってた」
今、ようやく、あの日の父の憤慨がわかる。
父の怒りと、風雅の憤りが重なる。
「そうか。お父さんが！　ずいぶんしっかりした考えをお持ちの方だったんだなぁ。お会いしたかったなぁ」
ふと、私は、父と弟が議論になりかけた夜を思い出した。
もし、あのとき、風雅がそばにいたら、父とどんな会話になっただろう？　湿っぽい感傷におちいる。
「あっ。山根のこげてる。私のも」
風雅がイカ玉と豚玉をくるり、くるりとひっくり返した。
今夜は、思いもかけない方向に話が進む。私もしっかり考えなきゃ。
私はこげめのイカ玉にソースをぬってマヨネーズをかける。食べる。おいしい。風雅も豚玉をもりもり食べる。
「山根、食欲ありすぎ」
「あったりまえ。体が資本だもんな」
風雅がキラキラと輝いている。
私は希望がわいてくるような気がする。
「ああ。今夜の豚玉は最高にうまい！　また会おうな」
「うん」
そろって〝たまる〟を出ると北風が顔面にふきつけた。
あれから一か月ほどで風雅から、一枚の葉書がとどいた。
――おーい。元気かー？　オレは、今、平頂山事件を研究してる。日本軍は、写真を撮ってやると村人をだまし、集め、虐殺した。凄惨な事件だったことはまちがいない。過去に、なにがあったか知りたい！
――私も図書館で資料など調べてみます。また連絡するね。
――平頂山の事件は40年も土中に埋もれたまま。近年、やっと中国政府が掘り起こした。資料を探すのは難しいと思う。いずれ、オレは中国へ行く。でも、おおきに。



こうして、私たちの文通が始まった。
――南京大虐殺事件なんて無かった、と論じる人もいる。が、違う。確かにあったのだ。『南京が落ちれば、日本は大勝利まちがいなし』とか、『南京城一番のりの誉れの部隊はどこか？』とか、『いつ南京は陥落するか』とか。報道各社があおりたてる。マスメディアに問題あり！
――図書館に古くからの新聞の縮小版があるの。調べます。
――農業移民として、満州に渡ると二十町歩の土地がもらえるって話は嘘だ。
中国の人々が汗を流して耕した農地を、日本軍が安く買いたたいて回っただけだ。
どうして、嘘をついたり、だましたりするのだろう？
私は返事の手紙を書いた。

山根風雅さま
両親から、二十町歩の話は聞いています。
当時、母の村からも人々は満州に、夢をもって、希望をつないで、海を渡ったそうです。
満州とは、いったい、なんだったのでしょう？
坂上千秋

## 10　ベストセラー

私は日々の仕事をこなしていた。そのうち、同僚がすごい本が出たとさわいでいる。なんでも満州の話とか、七三一とか。ベストセラーになってるとも。
読みたい。いいえ。私は読むべきだ。
だって、父は複雑な思いを抱えて満州に渡ったのだから。

**『悪魔の飽食』森村誠一　光文社　1981年**

タイトルもすごいけれど、表紙もかなり不気味だ。建物のような写真に、緑色の骸骨のような顔が重なっている。ぎょっとする。けれども、私は読み始めた。とちゅう、何度も本を閉じてしまいたくなった。肌が総毛立つような恐ろしさを何度も、何度も……何度も感じた。

**日本は1932年中国東北部に『満州』を造った。ハルビン市から南へ20キロメートルの地点、『平房』に『関東軍防疫給水部』を設立した。**
**表むきは戦地での給水活動だが、裏の顔は細菌兵器の製造と人体実験と細菌戦の実行だ。七三一部隊。石井四郎が**

部隊長だ。

さまざまな細菌の研究がされた。ペスト、コレラ、炭疽菌が最も毒性が強い。その中でペスト菌が一番使われた。

ペスト菌を媒介するのはノミだ。

石油缶の底に、ペスト菌を注射したペストネズミをおく。たちまちノミがペストネズミの血を吸って、ペストにかかったノミができる。

ペストノミ！

大量のペストノミを製造し、撒布すれば伝染性のペストが流行する。ペストにかかると、高熱をだし皮膚は乾燥して黒紫色、黒色に変わり死亡する。和名を黒死病という。

細菌は気温や湿度の変化で死滅したり弱まる。

より濃度の高い、毒力の強いペスト菌を手に入れるため、生きてる人間（生体）に注射する。死体では雑菌がはびこるから純度の高い菌がえられない。

生体から生体への、ペスト菌の回し打ちだ。

『悪魔の飽食』要約

ペスト菌の回し打ち？　生きている人間に？

『なんや！　なに、打ったんや！』

突然、なんの脈絡もなく、父の怒声が、私の耳に入りこみ、ひびく。

あの真冬の夜に、父は、確かに『なにを打ったんや！』と、どなった。

なにを？

ペスト菌。

バカな！　そんなこと、あるはずがない！

思い浮かんだことは……なかなか消えてくれない。

どうして、私はこんなことを考えてしまうのだろう？

関係ない。父とは！

結びつけるほうが、おかしい。おかしすぎる。

『いやや！　行かんぞ！　どっこも行かんぞ！』

まるで追い打ちをかけるように、父の悲痛な叫び声が、反響する。おちつこう。冷静になろう。深呼吸をこころみる。

七三一部隊は、大量のペストノミを使っての、細菌戦実行のため、緻密なネットワークを造り上げた。

七三一本部を『平房』に。『北京』『南京』『広東』、そしてシンガポールまで組織した。

この七三一本部がある『平房』からそれほど離れていない場所に『新京』がある。

新京に、たった一つだけ、規模も小さいのだけれど、――関東軍馬（獣）防疫廠――100部隊がある。

『悪魔の飽食』要約



ま、まさか！

私は、軍馬（獣）という文字に、異常反応する。

『新京』――軍馬防疫廠がある町。

その新京（現在は長春）に転勤したと、母が言ってた。

も、もしかして……父が、関係してる……？

関東軍軍馬防疫廠＝100部隊に。

そんなこと、絶対、あるはずがない！

でも、私は、父の部屋で、病死した大型犬の心臓のホルマリン漬けを発見した。

父は学生時代の解剖実験の一例だと言ったけれど……。

違うよ。違うよね。絶対に。

父は100部隊に関係していない……きっと……。

私は、七三一部隊から、100部隊から、目をそむけてはいけない。実際にあったことだから。

最後までがんばって読みとおした。私には読まなきゃいけない義務があったから。父の部屋に黙って入って、私は断りもなしに探ってしまった。

## 11　紅い空

その本のあまりの残酷さに呆然となりながら、私は図書館の仕事を毎日こなしていた。

そんな仕事帰りのある日。

周りが、いやに赤い。

空がまっ赤だ。夕焼けだ。

でも、ここまで赤い夕焼け空を見たことがない。

緋色といえばいいのだろうか？　金色を含んでいる。空全面にはりついた雲の底が、鮮やかな紅色。

まぶしい。

怒ってるの？　お父さん？　私が疑ったから？

千秋。お父さんを信じられないのか。

そんなことないよ。信じてるよ。

でも、もしも……もしもよ。

お父さんが100だったら、辛かったんじゃない？

私にも……お母さんにも話さないで……。

気がつくと、赤色が消えている。

しばらく、私は空を見上げるのを忘れていた。

もう一度、空を見上げると、灰色に冷めていた。

ほっと息を吐きだす。

やはり、私は、父が１００部隊だったかどうか確かめなければいけない。

私のために。そして、父自身の誇りのために。

でも、どうすればいいだろう……？

父の部屋。

心臓のホルマリン漬けを見つけたあの部屋に秘密が隠れているかもしれない。

図書館は、土、日も開館する。母は手のこんだ料理を作ることや編み物をやめた。でも、火曜日に市の染色教室に通いだした。私は火曜日に休暇をとった。

父の部屋は長いこと使われないで埃っぽい。蜘蛛が机と壁の間や、並べ方で凸凹ができた蔵書の間に巣をはる。

お父さん、ごめんなさい。今日は中に入らせてもらいます。私は乾いた古タオルであちこちふきながら、蔵書などを探る。あっというまに古タオルが汚れる。

父は本当に勉強家だ。蔵書のあちこちを鉛筆で小さくチェックし、付箋をつけている。書類は茶色の封筒にまとめてる。主に医学に関する本や書類で私には難しすぎる。

何冊もある古びたノートを開いてみた。

あらゆる動物の病気や治療法、予防法などを几帳面なきれいな字で書いてある。とちゅうからは、特に馬の病気についての記述に変わる。

馬の伝染性貧血とか、馬の日本脳炎とか、破傷風とか……多くの症例をていねいに書きしるしている。どのノートも最後まできっちり書き込んでいる。

けれど、余白があるのに切り替えていた。

次のノートの表紙に、「満州」とだけ書いて、下に「坂上忠男」とある。父の名前だ。

＊炭疽菌―ウシ、ヒツジ、ヤギ、馬、ロバ、草食性動物。急性敗血症にかかり二、三日後に死亡。激しい疝痛（腹痛）を起こし、鼻孔、口腔、肛門、膣などの天然孔からの出血。暗褐色、凝固不全の血液。人畜共通伝染病。

土壌病の一種―炭疽菌は芽胞（胞子）を作る。夏に昆虫、ミミズ、モグラで媒介。雨期に川が氾濫して芽胞が拡散し、土壌に潜り込み、乾期に発生する。炭疽菌常在地帯（常に炭疽菌がある場所）を形成する。一切の治療法、予防法、まだ見つかっていない。一頭でも病馬が発見されれば淘汰。（すなわち処分）

＊鼻疽菌―悪性伝染病。十七～十九世紀にヨーロッパ、アフリカ、中近東、アジア大陸に発生。人畜共通伝染病。



病馬は膿様（うみ）鼻汁。41度C。顔面、四肢、肩、胸、下腹に念珠状索腫（ぶつぶつ）ができて、一、二週間で死亡。鼻疽菌は芽胞を作らない。

１９４０年代の満州や内外蒙古＝鼻疽菌常在地帯。一切の治療法、予防法、まだ見つかっていない。

この二つの細菌以外、何も書かれていない。ノートの端がやや黄ばんでいるもののまっ白だ。

なぜ？　この二種類の細菌のみ書いたんだろう？

しかも、ノートのタイトルが「満州」だ。父は日本軍に召集されて満州に入った。

なにがあったのだろう……？

１００部隊とは、いったい、なんだろう？

どんなことが行われ、なにを意味するのだろう……？

ますます疑惑は深まるばかりだ。

## 12　七三一部隊および１００部隊

次の水曜日。私は休憩時間に自分自身がレファレンスを受ける思いで、七三一部隊とか１００部隊とか細菌に関する本を検索してみた。見つかった。

『消えた細菌戦部隊』　常石敬一　海鳴社　１９８１年

森村さんの本と同じ年に出版されたんだ。常石さんの本も反響が大きく、１９８１年の５月１５日に初版、１９８１年の5月30日に二刷が発刊されている。

ページを開くと大きな地図がある。中国東北部に、ハルビン、長春（新京）、安達がある。中央部で黄海よりに、北京がある。さらに下に、上海、寧波だ。中国の北側にソ連があり、ハバロフスクがある。そして中国とソ連にはさまるようにモンゴルがあり、中国との国境にノモンハンがある。

**満州で、関東軍の命令の下、七三一部隊および１００部隊が存在した。**

**満蒙の獣疫予防史より満州には重大な伝染病があった。**

**「新京」に、関東軍獣医部防疫（伝染病および農作物の病害虫を予防）の業務を起こした。**

**１９３９年、ノモンハン事件が起こる。**

**モンゴルと満州の国境地帯で、日本とソ連が衝突事件を起こす。日本が大敗をした。**

**『消えた細菌戦部隊』要約**

あ。満蒙の獣疫予防史。

父のノートにあった二種類だけの細菌は、この獣疫予防史に関係してるのだろうか？　けれども、炭疽菌による伝染病とも、鼻疽菌による伝染病とも全く書かれていない。

七三一部隊に捕虜として送り込まれた多くの人々は、中国人、朝鮮人、モンゴル人、ソ連人だった。

ソ連人はスパイなどの容疑をかけられ憲兵に連行された。日本もスパイ活動を行っている。捕虜に名前はなく「マルタ」と呼ばれた。男性だけでなく女性もいた。

「マルタ」は全く裁判を受けていない。

人体実験が行われた。故意に病気を負わせ「マルタ」を治療する。ありのままを最初から映画で記録した。

約三千人が殺された。

七三一部隊員は河川や、井戸や貯水池に細菌を投げ込み、伝染病の拡大をねらう。あるいはまんじゅうにチフス菌を注射し、ばらまく。ビスケットも用意した。ビスケットになにを加えたかは書いていない。

『消えた細菌戦部隊』要約

七三一部隊のことはかなりわかってきた。

では、１００部隊では、どんな様子だったのだろう？

初めてだ！　初めて１００部隊を書いてある。１００部隊は諜報部と連絡をとり、スパイ活動をしていたのか？

元日本関東軍獣医部長高橋隆篤獣医中将は、

「…人間の大量殺戮の為および家畜、作物の汚染をもって経済的な損害を与え…」と、供述した。

関東軍は人間だけでなく、家畜や収穫物までねらう。

とうもろこしに黒穂病菌を撒き、大豆には紫斑病菌だ。黒穂病で汚染された麦、アワなどの穀類がまっ黒な塊になる。綿畑にはチフス菌を運ぶ黒跳虫を放つという。

『資料・細菌戦』要約

人間だけでなく、家畜や収穫物までねらう。

ふと、父がノートに書きしるした炭疽菌が頭によぎる。あれは芽胞（胞子）を作り、土壌に潜り込み、乾期に発生する。たちが悪い細菌だ。収穫物までもねらうということは、この菌を使ったのではないだろうか？

第七三一部隊軍医少将川島清は、

「殺人細菌に感染させられたる……囚人が回復する場合……再実験を免れ得なかった……全快後は次々と他の細菌による感染実験……とにかく……この「死の工場」から生きて出る者は一人もいなかった…」と、供述。

第七三一部隊教育長西俊英は細菌兵器に必要な材料を確保。細菌戦遂行の要員を育成・指導した。西俊英は秘密記録映画を見て、

「…飛行機は敵地の上空で撮影され……地上には中国軍の移動および部落が見えた……飛行機が飛行場にもどると……「作戦終了」の字幕が現れ、「結果」の字幕が現れる。中国紙には、寧波（中国の中央地方）方面で、突然、猛烈なペストが発生したとの記事が掲載された」と供述。

『資料・細菌戦』要約

「死の工場」「作戦終了」「結果」「猛烈なペストが発生した」ひどい。ひどすぎる。

――ずっと以前に、父は『ロシアには屍を踏みこえて進め』の思想があると怒った。でもね。負けず劣らず、日本は、気を失うほどひどいことをしてるんだよ。

あのとき、父は長兄の忠輝が戦地につく前に軍艦に撃沈されて死んだと、激しく怒った。

『戦争そのものがまちがいや！』と憤慨した。

お国のため、天皇陛下のためと召集令状が届いたら拒否なんかできなかった。すれば、憲兵に捕まるだけだ。

関東軍獣医部防疫は、実際、どんなことをしたのだろう？　ほんとに、１００部隊に関しては、全然わからない。

『資料・細菌戦』日韓関係を記録する会　晩聲社　１９７７年

ハルビンや安達からさらに、さらに北に進むと、ソ連に入る。ソ連にハバロフスクがある。

１９４９年12月25日～30日まで（日本の敗戦後）ソ連のハバロフスクで、元日本軍軍人の裁判が行われた。元日本軍人を一人ずつていねいに訊問し、供述を記録した。本人が自ら語っているので、信用できる。

元日本関東軍司令官山田乙三大将は、

「…第七三一部隊は主としてソビエト同盟、蒙古人民共和国および中国に対する細菌戦の準備を目的として編成された…」と供述した。

そして、第１００部隊の任務は、

「…流行性病菌をもって家畜を感染せしめ、牧場、貯水池および河川を感染……第１００部隊は関東軍司令諜報部（スパイ活動）と密接なる業務上の連絡をとり…」と供述。

『資料・細菌戦』要約

（「　」内は引用。……は筆者による。以下同様）

むだ死にでも、どうしようもなかった。

**第100部隊実験手畑木章は、**
**「…関東軍第100部隊は……鼻疽菌、炭疽菌、牛疫菌、……を培養し、繁殖していたから、実際には細菌戦部隊であった。第100部隊は……家畜および生きた人間を使用する実験が行われた…」**

**第100部隊に獣医として勤務していた福住光由は、**
**「…第100部隊は……細菌学者、化学者、獣医および農業技師を擁して（かかえて）いた……ソビエト同盟に対する謀略（はかりごと）細菌戦の準備を目的としていた……毒薬の効力を検定するため、家畜および生きた人間に対する実験を行ってきた」**

**『資料・細菌戦』要約**

えっ！　100部隊でも、生きた人間の実験をしたの！
七三一だけが生体実験をしたんじゃないの！
調べれば、調べるほど、恐ろしい事実が浮かんでくる。
七三一部隊の人々も、100部隊の人も、決して良いことをしているとは思っていなかっただろう。
実験をしながら、どんな気持ちだったのだろう？
獣医は、本来、病気になった家畜を治療する医師のはず！
なのに、実際にやっていたことは、健康な家畜を病気にしていたのだ。
実験手の畑木さんが、鼻疽菌、炭疽菌……を発見し、繁殖していたと証言している。
私は、父が、炭疽菌と鼻疽菌を書きしるし、それ以後はなにも書いていないノートを思い浮かべた。今まで炭疽菌については何度も目にした。
しかし、鼻疽菌については、今回が初めてだ。
鼻疽菌とは……いったい、なんだろう？

（筆者注）
「満州には恐ろしい病気があります。鼻疽というのです。馬や牛や豚などの家畜に多い病気ですが、人間にもうつります。とてもはげしいうつり病で、まだこの病気を治す方法はもとより、防ぐ薬さへも発見されてゐないのです。
中略。もう一歩で立派な薬を発見するところまで来てゐるのに、とうとう鼻疽にかかって国家の為に死んでしまった学者があります。豊島武夫さんといいます。中略。
これからの戦争には毒ガスの代わりに黴菌を撒き散らす戦術があります。だからして一層これを防ぐ研究が大切だったのです。かへすがへす残念なことではありませんか」
『満州における軍馬の鼻疽と関東軍』小河孝　文理閣　2020年に掲載「満州日日新聞附録・小学生新聞　1936年1月25日」引用



**第100部隊勤務員の平桜全作は、**
**「1942年～1944年まで、偵察・謀略別隊長としてソビエト同盟に対する特殊偵察（密かに敵の様子を探る）に参加した。ソビエト同盟との国境……一度ならず貯水地を汚染した」と供述。**
**平桜全作は、獣医中尉だ。**

**『資料・細菌戦』要約**

父も獣医中尉だった。
ハバロフスク裁判の資料に、父の名前は、無かった。
だからと言って、父が100部隊ではないとは言い切れない。むしろ、反対かもしれない！
父が、100部隊だったという可能性は十分ありうる。
——背筋がぞーっと凍りつく。
頭の中で、どんなに否定しても、その不安からは逃れ切れない。
私。いったい、なにしてるの？
父の秘密をあばきだして、どうするつもり？
もしも、父が100部隊だったとしたら。
私は、父を、受け入れられるだろう……か……？
あの父が、馬を含めてあらゆる動物の病気を治療するのではなく、健康な家畜を病気にするのだ。
どんなに辛いだろう！　苦しいだろう。きっと、とても、思い悩んだだろう。
お国のため、天皇陛下のためと言われれば、否応なしに、従わなければいけなかった。
身も心も苦しんでいただろう父を、私は、受けとめる。
と、口では簡単に言えるけれど……。
でも、私は、理解できる自分でいたい。
父は、1965年2月19日に亡くなった。
『資料・細菌戦』および『消えた細菌戦部隊』および『悪魔の飽食』が出版されたのは父の死後だ。
七三一部隊のことは、ひた隠しに隠されてきた。そして、1945年8月9日、ソ連侵攻の前に、七三一部隊および100部隊は徹底した証拠隠滅をはかった。
もし父が関係していなかったら、七三一部隊のことも、100部隊のことも、知るはずがない。
獣医中尉平桜全作は、特殊偵察を行っていた。そして、100部隊は関東軍諜報部、つまりスパイと密接に連絡を取り合っていた。
お父さん、どっちだったの？
知れば知るほど、考えれば考えるほど、空恐ろしさに胸

が苦しい。うずくまりたくなる。
風雅に、話を聞いてもらいたい……。
すると……ゆっくり、静かに、父が思い浮かんでくる。
まるで、私と対話でもするかのように。
生前、父が、馬の話をするときは、いつだって、真剣な表情をしてた。

『人間は赤紙一枚で召集できる。米は18円80銭。馬が450円。馬は青紙で召集する』
父は、詳しく、当時の状況を一生懸命に教えてくれた。
私は赤と青の対比がおもしろかった。
『内地で馬は徴発を受け、軍馬に変えられる。村人は〝名誉〟だと言いつつ泣く泣く、大切な馬を手放した。お国のため、天皇陛下のためと言われればどうしようもなかった』
『ほんまに、馬も、人間も、やね』
父はふっと息を吐きだした。
『中国大陸は山野が多い。道も橋もない。車を使えない。雨や雹や雪が降ろうと、兵士も、軍需品を運ぶ馬もずぶぬれや。戦況が厳しくなり馬と兵士には食糧も水もない。兵士は最後の水を馬に飲ませた。馬も紙ほどやせて死んだ』
父はいかにも無念そうだった。
『馬は〝活兵器〟なのに、ひどい扱いや。馬は農家にとってどれほど大切か。あほな話や』
『カツヘイキって？』
父は、自分の手のひらに、指で漢字を書いてくれた。
『生きてる兵器って意味やね』
それから、父はたばこを取りだして吸い始めた。香ばしい匂いがした。私はたばこの匂いがけっこう好きだった。
ほーっと、父が細く、長く、たばこの煙を吐き出した。
『賢い馬ほど、なにが起こるかわかる。船底で運ぼうとするから、嫌がる馬をウインチで吊上げる』
あのとき、父は、リビングの壁の白いレリーフの馬を見上げた。
『ウインチや。わかるか？　あんな繊細な生き物を、ウインチで吊るし上げるんや。やめてくれ！』
父の悲痛な叫びがよみがえってきた。
『馬は暑さに弱い。あの大きな馬が船底でぎゅう詰めにされる。床に敷かれたワラが、小便と馬糞まみれで汚れる。そんな中で、病気になるな、言うほうがおかしい！』
それが、どんなに苛酷なことか、私にも想像できた。
『馬が〝伝貧〟いうて、伝染性の貧血になる。ウイルスによる急性の回帰熱をおこす。一度熱が下がっても、またすぐ上がる。硝酸ストキリーネを打って、殺す。殺処分や』
『最低・最悪』



中学生だった弟がつぶやいた。父は何度もうなずいた。
父の顔は歪んでいた。
『太平洋戦争に日本から中国に送られた軍馬は、五十万頭もいた。だが、敗戦後に帰ってきた軍馬は一頭もいなかった。ただの一頭もだ！　いや、いた。勝山号という名馬が。勝山号は強い気持ちをもち何度も奇跡的に支えられ、日本に帰ったという。そんな話を聞いたことがあったよ』
父は終戦とは言わなかった。「敗戦」と言ったのだ。
もしも、仮に、父が、「100部隊」だったら、馬のことを話さないんじゃないだろうか？
触れられたくない過去には、黙ってるのではないだろうか？
ねぇ、風雅。そう思わない？
私は黒のダイヤル式の電話の前に立つ。躊躇する。まず最初に、風雅に話したら、母はどれほど悲しいだろう。
父のことだから！
けれども、こんな話を、母に聞いてもらう訳にはいかない。あまりに刺激が強すぎる。弟は忙しすぎる。

## 13　相談

私は山根風雅に、悩みのすべてを打ち明けた。
「よっしゃ。東京には、国会図書館がある。調べる」
すぐ反応してくれた。東京の風雅から一週間ほどして、待ち遠しかった電話があった。
「坂上。あかんわ。ほんまに資料がない。七三一部隊の名簿も全く無い。わからん」
「七三一やないんよ。100なんよ」
「うん。六本木の外務省に、外交資料館があるというし、防衛省の防衛研究所に、戦史資料館があるから、そこも行ってみた。それでもわからんかった」
「ずいぶん、調べてくれたんやねぇ。ありがとう」
風雅の行動がありがたい。
「坂上のお母さん。新京、ハルビン、チチハルに引っ越したって、言わはったんやろ？」
「うん」
「もしも、100なら、ずーっと新京にいたのと、違うか？」
ハッとする。
そうだ。もし100部隊だったとしたら、転勤はない

だろう。新京から動かないのではないだろうか？
ほんの少し、ほっとする。
「それにな。坂上……七三一の元隊員は、なんも、けっして、しゃべらん。過去を恥じて、軍人恩給の申請もせん人もいるらしい。反対に、幹部は人体実験のデータを基に、医療関係の上部ポストについた人もいる」
悔しいけれど、風雅のいうとおりだ。
幹部だった軍医は、戦後の医学界、製薬会社など重要な地位についた。そして出世していった。
七三一の隊員の中で、前歴を知られるのを恐れて、当然の権利である軍人恩給の申請をしなかった人もいるのは事実だ。私は風雅に話す。
「石井四郎が敗戦時、軍事機密を、絶対もらすなって。この石井がどこまでも追いかけるぞ。石井は身長１８０ｃｍ以上の大男で、鬼のような形相で睨みまわしたって」
風雅は息をつめる。
「石井四郎と同じ部隊長だった北野政次の二人で、アメリカのＧＨＱと取引をしたんよ。細菌データーを渡すかわりに、戦犯にはしないと」
……
風雅も私も、しばらく言葉がでなかった。
「……お父さんは全然関係のない市役所勤めをしはったし、軍人恩給もキッチリもらったんやろ？　１００部隊やないと思う」
風雅が言った。
「そうやね。きっと、そうやわ」
風雅の言葉に、応えるように言った。
「なあ」
「なに？」
「オレな、一回、お母さんにお会いして、いろいろお話を聞きたいんやけど、あかんかなぁ？」
「……べつに、ええけど……」
「こうして、坂上を通しての又聞きじゃ、もれてることもあるかもしれへんしなぁ」
「わかった！　それでも、母には、七三一のことは、なんにも、私は話してないの。それだけは含んどいてね」
「了解！」

## 14　春の雪

春、弥生。三月の最終日曜日。
私は最寄りの改札口で、風雅を待つ。天気予報は当たって全国的に雨だ。
「おう。ひさしぶりー」



東京から新幹線で来た風雅は、黒の長傘をさし、背中にリュックを背負い、スーツを着こなしている。
「ごめんね。雨ふりに」
「そんなん、しゃあないやろ」
私は赤い傘。風雅は黒い傘。傘に雨音がひびく。
私の家で、風雅はまず仏壇の父に挨拶をしてくれた。そして土産物として、中国の菓子の月餅を差し出す。
「お口汚しですが、中国におられたと聞いてましたから」
おどろくほど風雅はそつがなく、敬語をつかいこなす。
「ありがとう。夫もこれが大好きだったんです」
さっそく、母は月餅を父に供えた。
「あなたは東京オリンピックに行かれた方でしょう？」
「はい。よくご存じで」
と、私を見る。しゅるっとうつむく。
「夫もいっしょの夕食のとき、一度、あなたのことが話題になりましてね。今日はよろこんでいると思います」
風雅は父の遺影を見つめる。
「清廉（せいれん）な印象の方ですね」
「優しい人でした。軍馬をとても愛していました。あたしは、夫がそばにいてさえくれたら、安心でなんの憂いもありませんでした」
話がはずむ。母はとめどなくしゃべる。まるで話相手に飢えていたかのように。
「あ、あ、や、山根さんは、お母さんから、話を聞きたいって」
「なんでしょう？」
母はあらたまって、座りなおす。
「引揚げ船に乗られる前は、どうされてたのですか？」
風雅は、静かに、問う。
「戦争に負けて、男の人はみーんなソ連に連れていかれて、残ったのは、年寄りと女や子どもばっかり。心細いから、公民館に集まって、共同生活をしたんです」
「共同生活？」
「はい。チチハルの公民館で集まって、酒まんじゅうを作る班。売りに行く班。その他雑用班。三つの班に分れます」
「たくましいなぁ」
風雅はおどろいている。私も初めて聞く話だ。
「ニィハオ、マントウ、プーヤオマー」
（こんにちは。おまんじゅう、いりませんか？）
母が、大胆に、そんな活動をしていたなんて！
今日、風雅といっしょだからこそ知ることができたんだ。
それにしても、もう陽子ちゃんは産まれていたはず。
「陽子ちゃんは？　陽子ちゃんはどうしてたの？」

「わたしは、陽子ちゃんをおぶって、だいたい酒まんじゅうを作る班やったの」
ほっとする。
「でも、たまには陽子をおぶって、売り班にもなったの」
「売れるんですか？」
「はい。酒まんじゅうがめずらしくてね。売れたり、プーヤオ（いらない）と断られたりです」
母は一度目を閉じて、また、ゆっくり開けた。
「でも中国の人は子どもを売ってくれと言うんです。
パーターメンマイゲイウオパー。恐かったぁ。それからあたしは二度と、売り班にはなりませんでした。日本に帰ってから、中国の方たちは、残された日本の子どもや婦人にとても優しいことを知りました」
私も風雅も、黙って聞いていた。
「そのうちに、帰還列車が出るぞーと教えられ、無蓋列車に乗りました」
「むがいって？」
私が口をはさむ。
「屋根のない貨車のことだよ」
風雅がそっと伝える。
「広い、広い、満州の荒野を何日も、何日も無蓋列車に乗るから、着てる物はすすけてくるし、おしめにも困る。水辺で列車が止まるとあわてて洗って、列車の中で干しました。雨がふってきたら、アンペラ（使い古した麻ぶくろ）をかぶるだけ」
「ずいぶんご苦労されたのですね」
声をつまらせて、母は目頭を押さえる。
「でもね。満州の夕日は、日本で見る何倍も、何十倍も大きくて美しいの。地平線にぽったり沈むんですよ」
母は遠い目をしていた。
「満州の夕日って、本当に美しいですね」
「どうして、ご存じなの？」
「ぼくは、大学で中国史の研究をしています。一度、中国に行きました。それで、日本のお年寄りや中国の方に戦争やいろんなお話を伺っています」
「あらぁ。山根さんは大変なことをされてるのですね」
「はい。それで、坂上さんからもお手紙をいただきました。お母さんの村からも、満州へ渡った方がおられると」
母は、ちらっと、私を見る。
「う、うん。風雅が、二十町歩をやるって話は嘘やって、言うから、私も返事を書いただけなん」
「そぉ。風雅、が、ねぇ」
母がほんの少し小首をかしげて、にっと笑う。
なんだか、私はどぎまぎしてしまった。



「それで、今も満州に渡った方はおられるのですか？」
「えーと。平原さんはご主人と息子さんが戦死されて、娘さんと故郷に帰ったと。山本さんはわかりません」
母はあごに握りこぶしをあてながら、
「もう一人……たしか十四歳か十五歳ぐらいの田倉勝次くんが、たった一人で満州へ行きました……たしか、少年、み、見……」
「少年見習技術員」
風雅が助け舟をだす。
「そうです！　それです」
「その方は、今、どうされています？　お会いできるでしょうか？　お話を伺っても、よろしいでしょうか？」
「え、ええ。ちょっと待ってください。勝次くんのお母さんと年賀状のやりとりだけはしてるんです」
母は中座して、一枚の年賀状をもってきた。
「勝次くんはあたしの夫が獣医として満州の軍隊にいることに憧れて、自分も行こうと決めたんですって。そのみ、見習……」
「見習技術員」
「そう。国民学校でも、すごくできる子でねぇ……」
母は思い出そうとしている。
「ぜひ、お話を伺いたいです。今も、紀見村におられるのでしょうか？」
「そうね……どうかしら？」
母は年賀状を裏返した。
「電話番号は書いてないわ。一度、お手紙を書きますね」
「ぜひ、お願いします」
風雅は、母に、深く頭をさげる。
風雅と私が、外に出ると、雨が雪に変わっていた。
ぼたん雪が、空から、ひらひら、ひらひら舞いおりる。
暖冬で桜が三月にいっせいに咲き誇った。満開に咲いた桜に、雪がつもり始めている。
「泣いてるみたい」
桜の花びらから、雪がしずくになって、たれる。
駅前についたので、喫茶店〝アン〟でコーヒーをたのむ。
「やっぱり、お父さんは関係してないと思うよ」
「どうして？　どうして、そう、言える？」
「うん。石井四郎は、隊員と家族全員を一人残さず、有蓋（ゆうがい）の専用貨車に乗せたんだ。どうしてだと思う？」
「やっぱり、家族を一人でも乗せ忘れると、秘密がもれないかと心配したからじゃない」
「そうだよ。一人残らず。二十両編成で、十五本もあった

というんだから。上から見たら、黒いムカデが走ってるように見えたかもな。ムカデってすっごい速足だぜ」
「もう。へんなたとえ」
風雅はあいかわらずだ。でも、それが、かえってほっとして、私のこだわりがほぐれた。
「それに、部隊が解散になっても、絶対、公職につくなと命令したんだ。お母さんは無蓋列車に乗ったし。お父さんは市役所に勤められた。だから、100には関係していないと思うな」
「……」
ゆっくり、安堵の思いが広がる。
「一度、お父さんの軍歴証明書を取り寄せるといいよ」
「なに、それ？」
「いつ、どこで、どんな任務で、どの軍に所属してたか、記載されてる。問い合わせることができるはずだよ。その兵士がいつ召集され、いつ除隊したか？　出港した港の名前まで書いて、なにもかも記録してるらしい」
「ありがとう。やってみる」
私はうなずいた。ただ、ぐじぐじと思い悩んでいるよりも、はっきりした目標ができたことがありがたい。
コーヒーが運ばれて、風雅はブラック。私はミルクも砂糖も入れてかきまぜる。
「田倉勝次くんのことがわかったら、電話するね」
「ありがとう。頼むな」
外に出ると、春の雪はやんでいた。

## 15　白檀の扇子

母が勝次くんと会える手筈をつけてくれた。
『あらぁ。忠男さんのお嬢さんけ？　こっちゃこそ。いつでも、まっとります。来てください』って。
すぐ風雅に連絡した。風雅自身が論文の発表・準備で忙しく日程はゴールデンウィークにきまった。当日、大阪の難波駅から南海電鉄に乗り換え、和歌山の紀見峠駅まで一時間半はかかる。
「このたびは、いろいろお世話になってありがとう！」
風雅は頭をさげる。
「いいえ。こちらこそ、ありがとう！」
私も風雅にむかって頭をさげた。
「軍歴証明を調べました。父は、ミャンマーやサイゴンの南方への転戦がわかったし、最後は『騎兵第四連隊』に復帰したの。そして、父が卒業した大阪農学校・獣医科は、堺市にあるの。戦後、父は堺市市役所に勤めたんです」
私は一度、言葉をとめて、息を吸う。



「だから、父は、100部隊に関係していなかったの！」
「よかったなぁ！」
風雅は心の底からよろこんでくれた。
ほーっと熱いものが、私のほほを伝う。自分でも気づかないうちに涙が一すじ流れていた。
声を出さず、涙がさらさら、さらさら、とめどなく流れる。父が100部隊でなく、よかった。
だけど、100部隊だった人はどんな思いだろう。シベリア抑留をされただろうか？
内地で待ってる家族に連絡はとれたんだろうか？
今、どうされてるんだろう？
当時、家族も、本人も、絶望しなかっただろうか？
そんなことを考えるから、涙が流れて、流れつづける。
目の前に、白いタオルが差し出されてる。風雅だ。そのタオルで涙をぬぐう。
「ありがとう。洗って、返すね」
「いいんだ。聞き取りのときは二、三本用意してるから」
風雅が、私からタオルを受けとって、グシャと顔をふく。
「ふふふっ」
車窓から、新緑の山がつらなって見える。ときどき鯉のぼりを立ててる家もある。勢いづいた新緑の山に、サツキやツツジの朱色や紅色が映え、大きな鯉のぼりが泳いでいるようすは心豊かになる。
「オレな。中国に行ってきた」
「ほんまぁ。よかったねぇ」
「うん。平頂山の遺跡紀（中国語表記）念館に行ってきた……」
言いながら、風雅は写真を取り出した。
すさまじい数の遺骨群だ。大人の骸骨。小さな子どもの骸骨。お母さんだろうか？　その子をかばうように背骨を丸めている骸骨。あまりの凄惨さに心が痛い。
「1932年、9月16日。日本軍は『写真を撮ってやる』と村人を集め虐殺。死体に重油をかけて燃やし、ダイナマイトで崖を爆破して、その土砂でずーっと隠してきたんだ」
「……1932年……確か……」
「そう。満州を造り上げた年。表むきは祝いながら裏ではこんな残酷なことを。信じられん。イケしゃあしゃあと」
私は唖然として声も出せない。
「過去になにがあったか、徹底的に調べる」
風雅は言いきった。
紀見峠駅について、二人で田倉さんの家にむかう。私はあの写真の衝撃から立ち直れない。
うなだれて歩く。

「あのぉ……坂上。こうして確かな聞き取りができるの、ほんまにうれしいんやで。ありがとうな」
「うん。そうや。そうやね。一歩ずつやね。調べんとね」
やっと私は気を持ちなおすことができた。
とちゅうの道ばたに、名前も知らないかわいい桃色の花が咲きそろっている。雑草まで元気で空にむかって伸びている。私は、ようやく五月の爽やかな季節を味わう。
目指す家はわりあいすぐ見つかった。木の表札は風雨に古びて、文字も読みづらいけれど「田倉」とわかる。
家の壁を覆っているのは合板材料だろうか、横に何段も並べられている。表面がはがれてベロンと垂れ下がり、五枚ほどベニヤ板が露出していた。
ベルは故障しているようだから、玄関口で、
「ごめんくださーい」と、呼びかけた。
「はーい」
現れた女性は、白髪まじりの小柄な人だった。
「どうぞ、どうぞ」と案内されたろうかの板はすり減っているが、水ぶきされて清潔だ。とおされた畳の座敷も掃除が行き届いている。
座卓を前に、やせて小柄な老人が座っている。
「よおぉ、おいでられた。座らんけ」
と、こげ茶色の手のひらを開いて愛想がいい。
「どうぞ。番茶ですけぇ」
と、小柄な女性は老人とならんで座った。
「お忙しいところをおじゃまします。田倉勝次さんにお会いしたくて伺いました。どちらにおられますか?」
風雅がていねいに訊ねる。
「わしらぁ、二人とも親ですけぇ」
両親はおじぎをした。
母親がゆっくり振りかえる。
小さな仏壇があって、一枚は軍服姿の青年。もう一枚はどこか建物の前に、制服、制帽をかぶった七人の少年が写ってる。
「この前列で、まん中で背中をすっと伸ばしてる子が、勝次です。一人で写ってるのは兄の勝男です」
母親が遺影のそばに寄って、勝次さんを指さす。
「勝男は戦死。勝次は病死」
と、座卓の前から動かない父親が言った。
ハッとして、冷や汗が私の背中を伝う。
「お参りさせていただいて、よろしいですか?」
風雅が言うと、両親がうなずく。仏壇の前に風雅と私がひざまずく。風雅が鈴を鳴らして手を合わせる。私も。
先ず、田倉勝次さんに参ってから、私たちは元の座卓の前にもどった。母親が、



「ありがとうございました」
と、言ってから、仏壇の下から細長い箱をだしてきた。
母親がていねいに箱から取りだし、ゆっくり開く。
扇子だ。白檀の。
ほんの少し、独特の木の香りが漂った。
「戦後、勝次の同期の方が届けてくれましたけぇ。勝次は病気で死んだけぇ。勝次は、自由時間でみんなが遊んでるときでも勉強しとったって。ハルビン医科大学へ進むって、ものすごうがんばってたって」
白檀の扇子がかすかにゆれる。
「なんの病気かも教えてくれませんけぇ。同期の方の名前も、住まいも、なぁーんも教えてくれません」
「勝次が、どこで、どんな仕事をしてたのかも、なぁーんもですわ」
父親がつけたす。
「あんたら、なんか、知っとるけ? 知っとったら教えて」
母親は四角い箱に詰められた葉書や手紙の束を取りだす。
「どれもこれも勝次からですけぇ。勝男のは、数えるほどもないんや。勝次はの、豚肉のうまいおかずが出たとか。腹いっぱい白い飯を食うてるとか。飯は金がいらん、ただや。寝るとこもただ。そいでもわずか、給料が出る。なぁーんも心配すなやって」
母親は、一枚の手紙を、広げた。
「世の中、そんなうまい話があるけ? 勝次はどんな仕事しとるんや? 思うても、こっちゃからは手紙はだせん。裏に住所が書いとらん」
父親の顔は真剣で、切実な思いが伝わってくる。
「あんたら、なんか知っとるけ? 勝次の教官からは時々便りが届いて、勝次君は成績最優秀って、いっつも誉めてたけど……死んでしもうた。お骨もない。どういうこっちゃ? 教えてぇなぁ」
「はい」
私は尻をもちあげる。自分の知る限りを、伝えたいと思ったのだ。
風雅が私の背に手をおいた。
振り向く。なに?
風雅はたじろいでいる。唇がわずかに震えてる。だから、私はそのまま腰を下した。
「ぼくらこそ、勝次さんからお話を伺いたかったのです。でも、そんな高価な扇子を、お母さんに贈られるって、本当に優しいし、お母さん思いだったのですね。それから、扇子を届けてくれた同期もえらい。勝次さんは、本当にいいお友だちがいたのですね」

勢いこんでいた母親がすーっと腰を落とし、白檀の扇子を広げその香をかいでいる。
「中国の匂いかなぁ。えろう細かい細工して上等そうや」
父親が言う。
「あんたらも、知らんのけ。そいじゃ、しゃあないなぁ」
がっかりしたけれど、母親が立ちあがって台所から、
「うちらが育てたもち米とうるち米をすり鉢ですって作ったチマキです。たぁーんと食べてくださいやぁ」
「いえいえ、恐縮です」
風雅がずり下がる。
「わしらぁ、あんたらが来てくれてうれしい。ゴールデンウイークはよそんちは娘や息子や孫でにぎやかでも、うちはいっつもひっそりしたまんま。食べてや」
父親がチマキをすすめる。
「いただきます！」
私が、チマキの笹の葉をむいて食べ始めると、風雅も手をのばす。きなこも用意してくれて素朴なおいしさだ。
「勝次はほんまになぁ。動物が好きでなぁ。うちのゆずの木ぃに、ヒヨドリが五個も卵、産んだんや」
母親が目を細めて話し始める。
「ちょうど、こんな時期やったなぁ」
父親が言う。
「五月の日盛りで、五個とも雛にかえったけど、一羽だけ、死にそうやねん。小さな巣のふちに首をもたせかけてな」
母親が、首をそらせて、今にも死にそうに目をつぶる。
「勝次はな、すり鉢で、ミミズをすり潰して、一生懸命、雛にえさをやりよりました」
思わず、私は今食べたチマキを吐きそうになる。
「平気やでぇ。よう洗って天日干ししてる。それからはおはぎも、ごま和えも作ってるよって、心配のうなぁ」
母親が胸を張るから、風雅はチマキを食べる。
「さんざん叱られて、勝次は小さなすり鉢を買うてきた」
「勝次と私で、一生懸命、雛を介抱したんです。兄弟鳥たちが巣立っても、最後の雛はなかなか飛びだせんの」
「父鳥、母鳥で、励まされてようよう巣立ちよった。それからや。勝次が獣医になりたいって、言いだしたんは」
父親と母親が交互に話す。
「わし、坂上先生に、満州で会ったら、よろしゅう頼みますって、手紙を書いたんや」
私は父の部屋で見つけた一枚の写真と便箋を思い出す。
「それで、満州で会えたんですか？　父と勝次さんは？」
「いいえなぁ。もし会えたら、勝次は葉書で書いてきます」
「父は、軍馬を本当に愛してました。そして、父は、勝次さんのお父さんの手紙をとても大切に持ってました」



「それ、伺おうて、わし、うれしい。ほんま、おおきに」
「勝次さんの獣医への強い意志が、満州へ駆り立てたんですね。今日はどうもありがとうございました。あのぉ……」
風雅は父親から大工道具を借りて、私はぞうきんで家の壁の合板材料をふいて、いい接着剤がないから、風雅が小さな釘で打ち付けて修理した。
「なんや勝次が帰ってきたみたいや」
と父親がよろこぶ。母親は黙ったままうなずく。
「お母さん。扇子がよく似合いますよ」
「おおきに。ときどきは開いて、この香をかぐけぇな」
両親が手をふって、私たちを見送ってくれた。
帰路の車中だ。
「あんなに知りたがってから、話してもええんちゃう」
「うん……でもな。あの二人は十分に苦しんだ。本当のことを知ったら、もっと辛いんやないか。坂上だって、あれほど、お父さんのことを悩んだやろ？」
そう言われたら、そのとおりだ。
**少年見習技術員は七三一部隊教育部に配属された。**
**仕事は病原菌の大量生産の助手や、細菌を寒天培養液に植え付けたり、生じた細菌の掻き取りだったり、細菌の入った試験管を運んだ。小さなミスでも死亡につながる。**
**でも、少年隊員にはなにも知らされない。死亡者がでて初めて、そんな恐い仕事だったとわかる。**
**見るな、聞くな、言うな。**
**学科の勉強も膨大で数学・語学・化学（特に大変）・物理・軍事学・細菌学・生理学＝高度で非常に速く勉学が進む。**
**少年技術員には、全国から優秀だが、家が裕福でないため、上の学校に行けない生徒をおもに集めたらしい。**
**敗戦時**
**1　郷里に帰った後も七三一に在籍の事実を秘密。**
**2　あらゆる公職には就かぬこと。**
**3　隊員相互の連絡は厳禁。**
**部隊が解散しても少年たちは束縛されていた。**

**『悪魔の飽食』要約**

勝次さんは、ハルビン医科大学に進み、獣医師か臨床検査技師の資格を取ろうとしていたのだ。
「父も勝次くんも、熱い想いを抱いて満州に渡った……」
「七三一部隊は人間を。１００部隊は家畜と植物と土壌を伝染病に侵す。どれほどひどいか！」
風雅は怒る。
「七三一部隊の兵士や少年兵。１００部隊の獣医師。当時

はお国のため、天皇陛下のためって働いてきた。なのに！」
　私は当時だけでなく、現在も苦しんでいる人たちを想像できる。
「表と裏の顔で差がありすぎる。だまして隠す。どんなに罪深いか！」
「ほんとに。でもね。私、思うんやけど、これを、石井四郎や関東軍の罪だけで終わらしたら、あかんと思うんよ。私らはしっかり考えんとね」
「当時だけではすまない。現在も続いてる」
「父は、『次はベトナムか』って、言った」
「うん。アメリカが、ベトナム戦争で撒いた枯葉剤は、100部隊がからんでるらしい。証拠がないから公表できないけれど」
　体に悪寒が走る。
「オレ、こんどのことを論文にまとめるつもりだ。それを学会で発表する」
「がんばって！」
「おうっ。職につなげるつもりだ。落ちついたら、一度、平房に行こうと思ってる。いっしょに行かないか？」
　平房……。
「日本が中国や朝鮮の人たちにどれほどの苦しみや悲しみを与えたか。はっきり検証しないといけないと思うんだ。『平房』と言っても、どれほどの人がわかるだろうか？」
「わからないよね」
「広島、アウシュヴィッツと言うと、すぐ理解できるだろう」
「うん」
「それに続く、世界三番目の負の遺産として、『平房』は保存されなきゃいけない。保存の状態がよくないんだ」
――広島、アウシュヴィッツ、『平房』
「平房で、新京で、なにがあったか？　こんな恐ろしいことは二度とあっちゃいけない。いっしょに行かないか？」
「うん。行きたい。私は、ぜひ『新京』に行きたい！　鼻疽菌のことを調べたい！　でもね。返事に時間をちょうだい。母にも、弟にも話したいから」
「もちろん、もちろん、待つよ」
　電車は難波駅につき、私たちはそれぞれに別れた。

　しばらくして、私は風雅に電話をかけた。
「お母さん、おどろかれただろ？」
「それが、あんがい、そうでもないの」
「へ？」
「風の向きなのか、ハルビンに住んでたとき、たまに、ものすごく嫌な匂いがする日があったんだって。新京には、そんなあまり長く、いなかったって」



「そうだったんだ。で、弟さんは？」
「それがね」
　私はくすっと笑った。
「お姉さんは大切な活動をするんだな。がんばれよって」
「認めてくれたんだ」
「今まで姉貴か、姉ちゃんしか呼ばなかった子が、お姉さんなんて言うんよ。ふふっ」
「なら、行こう。平房へ。そして新京（長春）へ」
「うん」
　電話を切った。
　雨音が聞こえる。
　私は窓を開けた。
　夜の庭に、雨が降っている。
　土壌を育む慈雨だ。

了

おもな参考文献

『悪魔の飽食』森村誠一　光文社　1981年
『消えた細菌戦部隊』常石敬一　海鳴社　1981年
『資料・細菌戦』日韓関係を記録する会　晩声社　1977年
『満州における軍馬の鼻疽と関東軍』小河孝　文理閣　2020年
『戦争にいったうま』いしいゆみ　静山社　2020年
『細菌戦部隊』七三一研究会・編　晩声社　1996年
『七三一部隊』アジア・太平洋地域の戦争犠牲者に思いを馳せ、心に刻む集会・実行委員会　東方出版　1994年
『戦争と疫病』松村高夫ほか　本の友社　1997年
『細菌戦のはなし』森正孝　明石書店　1998年
『細菌戦の罪』三友一男　泰流社　1987年
『満州の情報基地ハルビン学院』芳地隆之　新潮社　2010年
『軍馬の戦争―戦場をかけた日本軍馬と兵士の物語』土井全二郎　光人社　2012年
『戦争に征った馬たち―軍馬碑から見た日本の戦争』森田敏彦　清風堂書店　2011年
『軍馬と火戦』宮井三夫　紙硯社　1943年
『遠野馬物語』高草操　里文出版　2009年
『世界の果てのこどもたち』中脇初枝　講談社　2018年
『ある晴れた夏の朝』小手鞠るい　偕成社　2018年
『ほろびた国の旅』三木卓　講談社　2009年
映画『戦火の馬』スティーブン・スピルバーグ監督
映画『馬ありて』笹谷遼平　監督
漫画『フイチン　再見！』村上もとか　小学館
『高校生が追うネズミ村と731部隊』埼玉県立庄和高校地理歴史研出版者　教育史料出版会　1996年